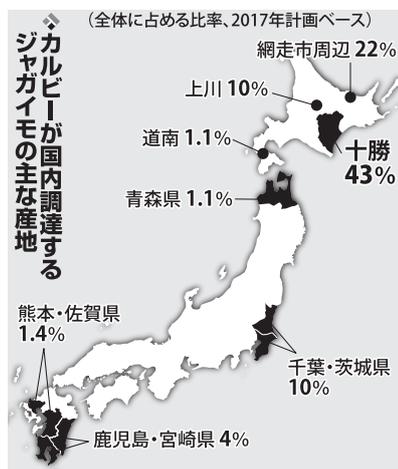


カルビー（東京）が十勝を中心とした道内の契約農家やJAに対して、2018年産の加工用ジャガイモで合計5000トンの増産を要請することが分かった。昨年は台風被害で十分に調達できず、主力のポテトチップス販売で一部休止に追い込まれた。今年産の調達量は道内で22万～23万トンと昨年から約1割持ち直したが、来年も収穫作業を肩代わりするなど農家支援を強化。作付面積を広げ、安定調達につなげたい考えだ。



同社の伊藤秀二社長が、十勝毎日新聞社の取材で明らかにした。ポテチや「じゃがりこ」などスナック菓子を製造するカルビーは、加工用ジャガイモの大口需要家。今年は全国で約28万トンを調達し、約8割を道産が占める。このうち十勝はほぼ半分（10万トン程度）を供給する国内最大の産地。調達子会社カルビーポテトは帯広市に本社を置く。

カルビーは12月以降、道内の生産者を回り、来年度産の収量引き上げを要請する方針。伊藤社長は「十勝でも帯広市の川西地区、芽室町などに引き続き作付面積の拡大を打診したい」と語った。十勝のほか、これまで調達量が多くなかった地域も開拓し、合計5000トンの積み増しを目指す。

増産要請の背景には、昨年の台風などで十勝を中心に不作となり、今年4月以降の商品供給に支障が出た「ポ

テチ騒動」がある。輸入ジャガイモの調達比率を大幅に増やす手もあるが、輸送費の高さや輸送中の品質劣化がネックとなる。

国産農産物を志向する消費者も増えている。伊藤社長は「輸入物はあくまで代替品の位置付け。国内調達量が増えれば、スナック菓子以外の用途にも活用できる」と国産ジャガイモの利用拡大に意欲を示した。

もっとも、道内のジャガイモ作付面積（生食用を含む）は減少傾向にある。農家にとってジャガイモは収入が多い半面、小麦などに比べて収穫の手間がかかり、高齢化で労働力が不足する農家に敬遠されがち。十勝も似たような状況だ。

収穫代行、品種提案も

カルビーは農家に代わって収穫作業を有料で請け負い、高齢生産者をつなぎ留める。十勝では調達するジャガイモ作付面積の1割程度で収穫を代行する。また病害虫に比較的強く、規格外品が出にくい自社開発品種の作付けも提案する。

加工用ジャガイモをめぐるのは、農林水産省が18年度予算の概算要求で30億円を計上。増産に取り組む農家に助成する方針だ。十勝の生産者がどこまで増産要請に応じるか注目される。

農業ガイド1137号

2017年12月16日

アライグマ急増 農家警戒

作物の食害で農業へも悪影響を及ぼすアライグマの捕獲数が十勝管内でも徐々に増えている。現状では管内の捕獲数は道内の1%に満たないが、餌となる農作物が豊富なため爆発的に生息数が増えやすい地域とされる。繁殖力が強く、年間1000匹以上の捕獲がある他地域はここ10～20年で急増してきていることもあり、関係者は警戒を呼び掛けている。

道によると、1996年度に道内で初めて、石狩管内の恵庭市で9匹が捕獲された。以降、空知、胆振、日高、留萌、上川と道央を中心に広がり、2015年度の道内の捕獲数は1万954匹。管内別では16年度、空知3195匹、胆振2043匹、日高2032匹となっている。

道南、道東では捕獲がなかったが、十勝で05年度に、1匹が鹿追でつかまった。09年度以降、20～40匹で推移したが、15年度に70匹、16年度に128匹、17年度は11月中旬までで240匹と急増。清水、芽室など西部で多く捕

獲されている。

農業被害は、道内では06年度が2809万円だったが、徐々に伸び、11年度に1億2073万円ピークに。15年度は8770万円となっている。アライグマは雑食性で何でも食べるが、特にトウモロコシや果樹など甘いものが好物。15年度の被害額内訳ではスイートコーンが4割に及ぶ。

十勝の被害額は10年度60万円、13年度73万円、16年度26万円とまだ多くはないが、十勝総合振興局環境生活課は「十勝では最近まで捕獲がなく、タヌキやキツネなど